

「長屋が繋ぐもの ～ヒト・ジカン・デキゴト～」

2010年1月20日(水)、阿倍野区で設計活動をされている望月芳恵氏による長屋の改修と暮らしぶりについての講演が行われました。

【暮らしの記憶】 改修のため、壁などを剥がしていく中で、子供の落書きや、素人仕事の改修跡など、従前の住み手の記憶を発見する体験をしたそうです。また、トイレの便器は、以前住んでいた老人が、足腰の悪い奥さんのためにセルフビルドで洋式に替えたもので、便器の前の壁に「good morning」と書かれた鶏の絵のタイルが貼ってあるそうです。おそらく、このタイルは、毎朝、奥さんがトイレを使った際に、少しでも元気になってもらえるよう貼られたもので、面識のない老人の人柄が忍ばれ、とても感動したそうです。改修を通して、従前の住人の暮らしぶりが伝わってくるという興味深いお話でした。

【長屋コミュニティ】 長屋の屋根裏は一続きに繋がっています。ある日、屋根裏のネズミの姿を見なくなり、その数日後、一番端のお宅に移動していたそうです。そこで、長屋の住民が協力してネズミ対策を行い、無事にネズミの駆除ができたとか。また、壁一枚で隣と繋がっているため、お隣の生活の気配がよく分かり、夕飯時のお裾分けや、休日の外出のお誘いもよくされるそうです。長屋住まいは、多様なコミュニティが形成されやすい居住形態だといえます。

長屋はヒトやジカン、デキゴトを繋げ、多様な関係性を生み出し、暮らしを豊かにする住まいであること、そしてそこでの「ゆるやかに繋がる暮らし方」は大阪の居住文化そのものであることを感じさせられた講演でした。 ■黒木宏一(G-COE特別研究員)